令和４・５年度　熊本県教育委員会指定
「熊本の学び」研究指定地域研究発表会

研 究 紀 要

令和６年１月２６日（金）
西原村教育委員会
西原中学校　　山西小学校　　河原小学校

令和４年度～「西原村の教育」グランドデザイン

基本理念　みんなで生きる

「基本方針」
教育は人づくり、教育は社会づくり

「目指す子供像」
自立し、より良く生きる子供

西原村で育む資質・能力

学びを探究する力
- リサーチ
- 思考

社会と関わる力
- コミュニケーション
- 社交性

自律する力
- 自己コントロール

西原村 3つの提言

提言 1 **ひと**
人と関わる機会を増やし、
思いやりや責任感、
自己有用感の醸成を図ります。

提言 2 **学び舎**
主体的・対話的で
深い学びに向かわせる
効果的な学習活動を工夫し、
質の高い学びの実現に努めます。

提言 3 **地域**
地域人材や資源を活用した
西原村ふるさと塾プロジェクトにより
社会総がかりで子供たちを育てます。

日々の学習や

社会との関わりの中で

スキルを磨く

研究主題

「熊本の学び」研究指定地域の特定課題の解決に向けた実践研究

「『新たな知』をひらく学びへ」

～自ら問いを発し、学び続ける子供の育成～

授業改善部会
重点取組事項
- 単元デザインの工夫
- 協働性を促す学び合いの工夫
- 「学びの自覚」の工夫

学級づくり部会
重点取組事項
- 生徒会と児童会が連携した主体的活動の推進
- 子供の主体性を支える学級活動の充実

連携部会
重点取組事項
- 五者連携による教育活動の充実
- 保、小、中連携による教育活動の推進

五者連携により西原村が一体となって子供の「生きる力」を高める

2　研究主題について

「熊本の学び」が目指すもの

【理念】　熊本のすべての子供たちが、「学ぶ意味」を問いながら、「能動的に学び続ける力」を身に付けることを目指します。

【３つの提言】
提言１　ふるさと熊本に根ざし、豊かな郷土の創造と自己の向上を目指し、能動的に学び続ける熊本の子供
提言２　問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、学びを深める熊本の子供
提言３　自分の学びの姿を知り、日々たゆまず、自ら学ぶ熊本の子供

【研究主題】　「『新たな知』をひらく学びへ」
～自ら問いを発し、学び続ける子供の育成～

「新たな知」とは
既有の知識、概念に新たな情報や経験を組合わせて構築した知識、概念を意味する。「なるほど」「分かる」「面白い」などの感覚を伴いながら獲得し、再構築したもので他者に伝えることが可能な知識。

「自ら問いを発し、学び続ける」とは
「不思議だな」「なぜだろう」「調べたい」を発端とした自己内発性の問いや課題をもとに学びを進めていくことで誘発される課題解決の循環であり、「新たな知」の獲得につながる意識的な行動。

【研究の仮説】
子供の主体性を生かした学級づくりを基盤とし、子供が自ら課題に気付き、解決に向けて主体的な学びに向かおうとする授業改善を行うとともに、五者が連携した教育活動を行えば、子供の進んで学ぼうとする意欲が高まり、自ら問いを発し、学び続ける子供が育つであろう。

【研究の方向】

【授業改善部会】
学習の中心となる授業改善

取組の重点
主体的・対話的で深い学びに向かわせる効果的な学習活動を工夫

重点取組事項
【視点１】単元デザインの工夫
【視点２】協働性を促す学び合いの工夫
【視点３】「学びの自覚」の工夫

検証方法
○i-check
○学力テスト
○ワードクラウド
○児童生徒や教師の意識調査

【学級づくり部会】
学習の基盤となる学級づくり

取組の重点
学級や学校の課題発見・解決に能動的に取り組む子供の支援
子供が安心して過ごせる学級の支持的風土の醸成

重点取組事項
【視点１】生徒会と児童会が連携した主体的活動の推進
【視点２】子供の主体性を支える学級活動の充実

検証方法
i-check、県学力調査学校教師質問紙

【連携部会】
学習効果を上げる連携推進

取組の重点
地域人材・資源を活用した西原村ふるさと塾プロジェクトによる社会総がかりで目指す「みんなで生きる」風土の育成

重点取組事項
【視点１】五者連携による教育活動の充実
・各学年の「ふるさと塾」プロジェクト
・家庭学習の充実
【視点２】保、小、中連携による教育活動の推進

検証方法
i-check、県学力調査学校教師質問紙

3　取組の実際

（１）学級づくり部会

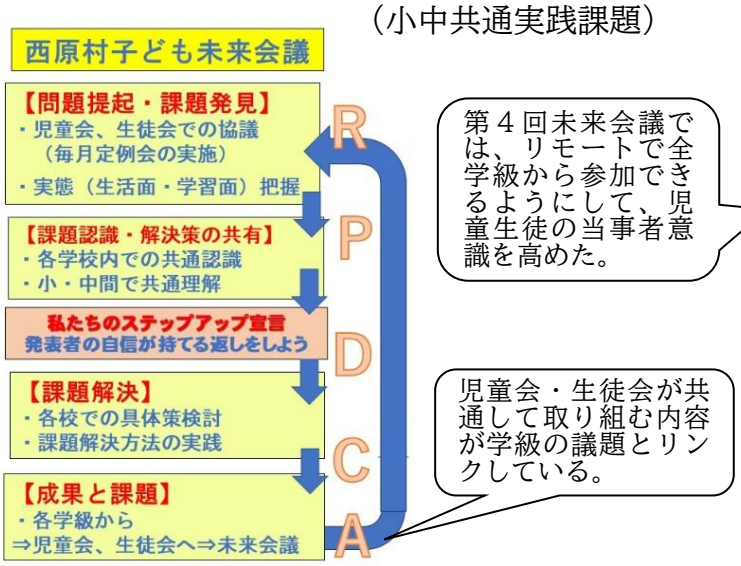
学習の基盤となる学級づくりを目指し、課題の発見･解決に能動的に取り組む子供の支援と学級の支持的風土の醸成のために以下の取組を行った。

【視点 1】生徒会と児童会が連携した主体的活動の推進

（ア）子ども未来会議の開催⇒各学校で共通する課題や問題の改善

- ● 児童会・生徒会の代表者によるオンライン会議
- ● 参集による会議
- ◎ ステップアップ宣言の策定

（小中共通実践課題）



第４回未来会議では、リモートで全学級から参加できるようにして、児童生徒の当事者意識を高めた。

児童会・生徒会が共通して取り組む内容が学級の議題とリンクしている。

第４回未来会議議題　（令和５年７月１８日実施）

① 「発表者の自信が持てる返しをしよう」の成果と課題
② 各小中学校全体での新たな課題
③ 各学校で成果のあった取組の報告
④ 話合いの振り返り（議会・各学級）

各教室からの参加の様子　　生徒会・児童会代表者会議

学校運営協議会委員からの意見　　行政・学校運営協議会・ＰＴＡ

【視点２】子供の主体性を支える学級活動の充実

（ア）特別活動での取組（小・中学校）

- ● 児童会・生徒会主導による未来会議と関連付けた取組
- ● 発達段階に合わせた話合いマニュアルの作成
- ● 各学校の特色を生かした主体的活動

各学校での委員会活動

縦割班活動

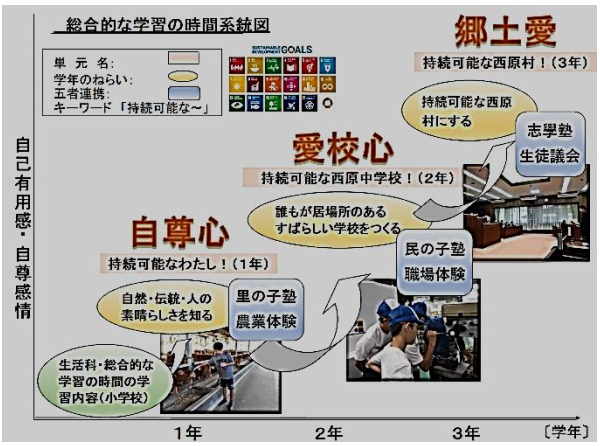
あいさつ運動

あいさつクラスリレー

（イ）総合的な学習の時間からのアプローチ（中学校）

- ● SDGs の「持続可能」をキーワードとした取組
- ● １年「持続可能なわたし」
  ２年「持続可能な西原中」
  ３年「持続可能な西原村」

系統的なテーマ、探究的･協働的な学習



（２）授業改善部会

「新たな知」をひらく学びの実現のために村内共通の「目指す学びの姿」を設定し、３つの視点に基づいて以下の取組を行った。

【西原村「目指す学びの姿」】

主体的な学びの姿
「なぜだろう？」「きっとこうすれば…」「もっと知りたい！」と、わくわくしながら学んでいる姿

対話的な学びの姿
互いの意見を伝え合い、比較しながら、「あれ？」「なるほど…」「やっぱり！」と、一緒に考えている姿

深い学びの姿
各教科等の見方・考え方を働かせ、「分かった！」「できた！」「もっとやってみよう！」と経験知や既習事項と関連付けている姿

【研究の視点と実践項目】

【視点１】単元デザインの工夫
- 「単元のゴールの姿」の設定
- 単元を通した学習課題の設定

【視点２】協働性を促す学び合いの工夫
- 明確な目的のある対話活動の位置付け
- 説得力をもたせる理由付けの定着

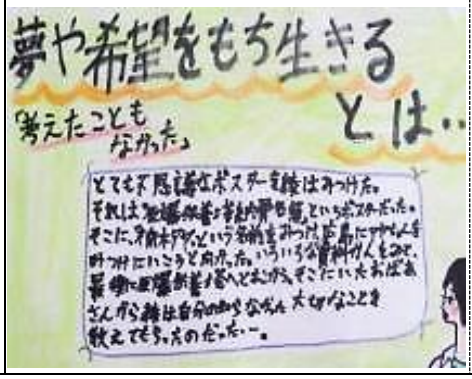
【視点３】「学びの自覚」の工夫
- 各教科等の見方・考え方を働かせた学習活動の位置付け
- 「分かった」「できた」「もっとやりたい」に繋がる振り返りの充実

【視点１】単元デザインの工夫　⇒　「主体的な学び」に向けたコーディネート

「単元デザイン」を教師と子供間で共有することは、「新たな知」の獲得に向かって単元の到達点までどのような学びをしていくのかを確認し合うことであり、学び続ける子供を教師が支え続けることを意味するものである。

（ア）「単元のゴールの姿」の設定
- 教師と子供で共有する「単元のゴールの姿」の設定と継続的な提示

（イ）単元を通した学習課題の設定
- 「主体的な学びの見通しをもたせる学習課題」の設定

【視点１】－（ア）	【視点１】－（イ）
中１英語「Unit 9 Think globally, act locally」	小５国語「たずねびと」
	

単元のゴールは、「西原村を訪れる多くの外国人に西原村の魅力を伝えよう」でした。今日の表現は、どのような場面で使えそうですか。

単元を通した学習課題「『たずねびと』に込められた作品のメッセージを伝え合おう」をもとに、「ポップをつくる」という言語活動を設定した。

【視点２】協働性を促す学び合いの工夫　⇒　「対話的な学び」に向けたコーディネート

それぞれの子供がもつ言語化できない知識は、協働生活の中で対話や共通する経験を積み重ねることで、共有化や言語化できる知識へと変わってくると考えられている。
一方、感覚や感情を伴って得た情報は「新たな知」や概念へと変換されるが、使用頻度等に応じて一過性のものが出てくる。そこで、「三角ロジック」話型といったスキルを取り入れ、情報を対話の中で強化・付加・修正しながら、深化した「新たな知」や概念の獲得ができるようにした。

（ア）明確な目的のある対話活動の位置付け

● 対話を通した思考の深まり（強化・付加・修正）を促す手順の工夫

①「考えを書く時間」（思考を表出する機会）

⇒ ② 教師による思考の見取りと補充指導

⇒ ③ 「同質集団で思考の強化を図る」「異質集団で思考の付加を図る」の使い分け

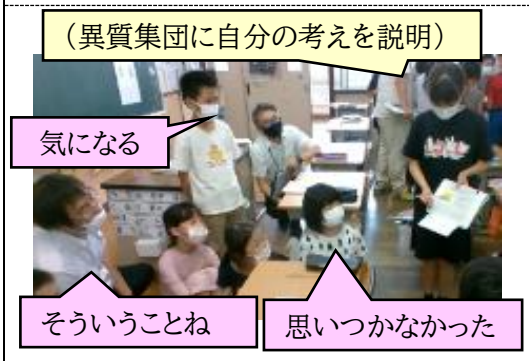
（イ）説得力をもたせる理由付けの定着

● 対話における理由付け（論拠）の定着

発達段階に応じて、「三角ロジック」話型に沿った思考の表出と対話の定着化

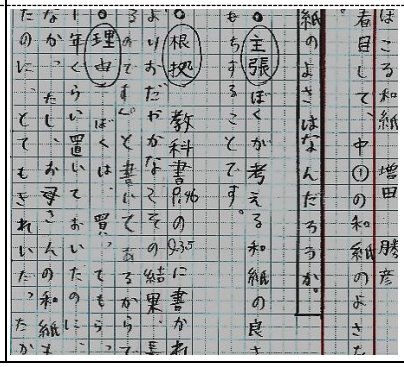
【視点２】－（ア）

小４算数「角の大きさ」

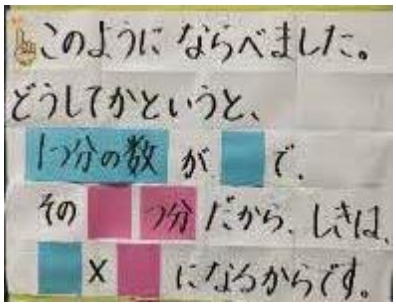


【視点２】－（イ）

小4国語「世界にほこる和紙」



小２算数「かけ算」



【視点３】「学びの自覚」の工夫　⇒　「深い学び」に向けたコーディネート

多くの教師が語るように、「なるほど」「分かった」「面白い」といった感覚や感情は、学びの深さと相関する。さらに質の高い学びは、課題追究する姿・形に変化をもたらすと考えている。

（ア）各教科等の見方・考え方を働かせた学習活動の位置付け

● 各教科等の特性に触れる深い学びの保障

（イ）「分かった」「できた」「もっとやりたい」に繋がる振り返りの充実

● 「何ができるようになったのか、できなかったのか」の自覚

【視点３】－（ア）　中２数学「平行と合同」

教科の見方・考え方を生かした解決方法を見いださせる。

↓

∠xの大きさを求めるときの多様な視点

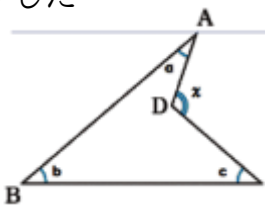
↓

予想される生徒の反応

・平行線の錯角や同位角の関係を使って

・四角形の内角の和から

・三角形の外角の性質から



どの説明方法でも
$x = a + b + c$

【視点３】－（イ）

「振り返りの視点」提示カード（表裏）

なぜだろう？ きっと　こうすれば… もっと　しりたい！	あれ？ なるほど… やっぱり！
【主体的な学びの自覚を促す振り返りの視点】 （提示場面の例） 必単元の導入場面において、主活動（「単元のゴールの姿」及び「単元を通した学習課題」の共有）を終えた後の振り返り活動 ・対話活動の前時において、思考を表出させた（考えを書かせた）後の振り返り活動	【対話的な学びの自覚を促す振り返りの視点】 （提示場面の例） ・対話活動を主活動とする場面において、対話した後の振り返り活動

【視点３】－（イ）

情意面の集団の推移（対話場面の前→後）

ワードクラウドを活用
（出現率の高い言葉を大きく、品詞別に色分けして表示）

新たな方法（引き算）を見つけ、みんなで共有できたことを示している。

なるほど…と思った意見を出した子供の名前（k.m）が大きく表示される。

単元を通した学習課題「五芒星（ごぼうせい）（星形正五角形）にある角の大きさを求めよう」

（３）連携部会

【視点１】五者連携による教育活動の充実

「新たな知」をひらく学びの実現のために五者が連携し、地域学習や家庭学習など子供の学びを支える以下の取組を行った。

（ア）各学年の「ふるさと塾」プロジェクト

実施内容
萌の子塾（小３）　自然観察
河の子塾（小４）　西原村の河川観察
風の子塾（小５）　自然エネルギー
山の子塾（小６）　宿泊体験と縄文笛製作
里の子塾（中１）　農業体験
民の子塾（中２）　職場体験
志学塾（中３）　議会体験

小学３年から中学３年までの児童生徒を対象に、教育委員会が中心となり、様々な方々が各方面から子供たちの育ちを支援するため、「ふるさと塾」を実施している。その中で５つのスキル（自己コントロール、社交性、コミュニケーション、思考、リサーチ）を育成している。子供たちはこの西原村を学習教材として、生き生きと学習に取り組んでいる。

「萌の子塾」（９月８日実施）

子供たちの感想
植物のことを詳しく知れて、いい勉強になりました。これから植物をもっと大切にしていきたいです。

保護者の感想
地域の人から学ぶことができるいい学習だと思います。これからも続けてほしいです。

担任の感想
俵山のすぐ近くに住んでいても知らないことが多く、草花のことや草原を維持するための人々の努力などを知るよい学習ができました。

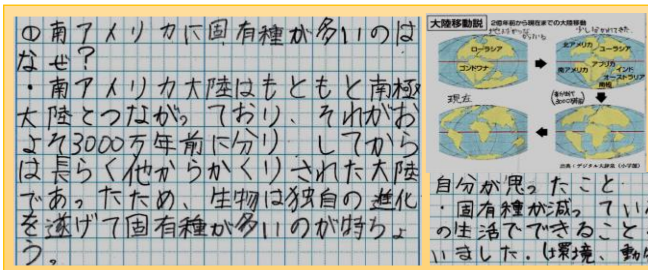
小森原野組合の方のお話
この学習を１つの糧として、自分なりに好きなものを見つけて学んでいってほしいと思います。私もこの俵山に勇気づけられてきました。みなさんもこの西原村の緑の原野をいつまでも大切にしていってほしいと思います。

西原村教育委員会
西原村にある希少植物を知ることで、西原のすばらしい自然に関心を持ち、郷土愛を育ててほしいと思っています。

（イ）家庭学習の充実（家庭と連携した家庭学習）

小学校低学年から保護者の方には中学生までの見通しをもって子供たちに家庭での学習時間を確保していただくこと、また、中学生では、自分が成長するための学習を積み上げていくことの大切さを西原村全体で共有している。学習内容は、担任等から出される「課題」や自分の学習を自分で決める「自主学習」とし、その割合が学年が上がるにつれ、変化していくことを目標としている。「自主学習」の内容については、児童生徒には単元を通して探究していく「わくわくメニュー」と基礎基本の定着を図る「ばっちりメニュー」の２つを提示し、自分で選んで取り組ませている。

～「自立したより良く生きる子供」をめざして～『家庭学習編』


自主学習の例「わくわくメニュー」（５年国語「固有種が教えてくれること」）

【視点２】保、小、中連携による教育活動の推進

それぞれの発達段階に合わせた「つけたい力」を明確にし、保小中が連携し、育ちを支援していくために「にしはらっ子元気プラン」（別紙参照）を作成し、配付した。

4　研究のまとめ

【成果】

◇子供（児童生徒）の変容

・支持的風土醸成の取組は、子供たちが安心して発言できる場づくりの意識と、それに続く発表内容の質の向上につながった。（学級づくり部会）【グラフ１】

・対話的な活動や学びの振り返りの充実を通して、これまでもっていた知識に加え「新たな知」を獲得することの喜びを認識できるようになった。（授業改善部会）【グラフ２】

・「子ども未来会議」や「ふるさと塾プロジェクト」の取組は、小中の子供たちにとって自分の将来に向けてのありようを自らに問う機会になった。
（学級づくり部会・連携部会）

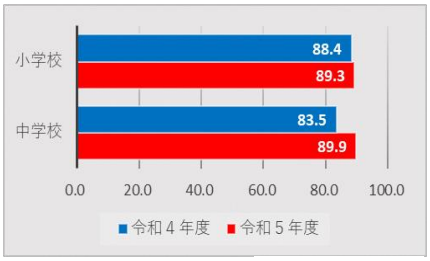
・各部会で実践した話合い活動の工夫が、協働的な学びを通して、自他の考えを深め合う効果を高めた。そのことが、新しいことや学びの面白さに気付き、自ら問いを発し、学んでいこうとする子供たちを育むことにつながった。
（３部会）【グラフ３】

◇教師の変容

・「単元のゴールの姿」から子供の実態を捉え直すことや、主体的な学びに向かう１単位時間毎の授業の振り返りを積み重ねることができるようになった。（授業改善部会）

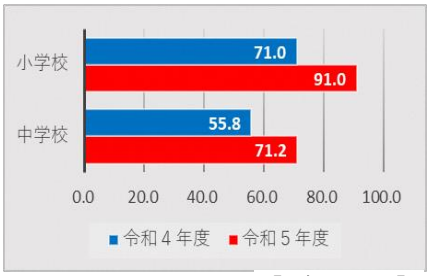
・子供たちが振り返りの言葉として発言する「面白かった」「分かった」といった曖昧な言葉をブラッシュアップし、学習内容に対して「何が分かったから楽しかったのか」「何が分からなかったから、次の時間までにどうしたい」といった次の学習に向かう目的や姿勢を問う教師の言葉が生まれてきた。（授業改善部会）

誰かが困っているとき、助けたり、励ましたりする雰囲気がクラスにあるか。



【グラフ１】

友だちの意見を聞いて新しいことに気づいたり、自分の考えが深められたりして、勉強って面白いなと思うことがあるか。



【グラフ２】

授業や生活の中で「不思議だな」「どうしてだろう」と思ったことを調べているか。

【グラフ３】

【課題】

①「すべての子供にとって居心地のいい場＝新たな知をひらく学びの場」であるという認識を五者が共有した上で連携し、そのための具体策を協議・探究していく必要がある。学級の支持的風土に高まりが見られる一方で、私たちは集団の中で自分の考えや意見等を思うように表現できないでいる子供のことを見過ごすことはできない。子供たち同士が認め合える集団づくりや活動を工夫し、誰一人取り残されることのない居場所のある学級づくりを目指していかなければならない。

②多様な一人一人の子供の日々の姿を見つめ、学習活動や生活等の実態を把握し、一人一人に合った学び方を追究していく必要がある。そのことが、すべての子供たちに「新たな知」をひらく学びを獲得することに繋がっていくと考える。

本日のご参会、誠にありがとうございました。

「一斉に発表者や教師の言葉に、視線が反応した。一瞬の静寂が訪れ、子供同士が言葉を尽くして説明し合う場面が訪れる。再び静寂が訪れ、子供たちは書き込みを始める。クラスの中の空気には、まるで潮が満ち引きを繰り返すようなリズムがある。ひたすら学びに浸り、教え浸っている侵し難い空気感がある。そこには、できることを誇り、できないことを気にして学びの輪から離れようとする子はいない。」・・・・・・・・　私たちは、そのような学びの姿を願い求めてきたつもりです。道半ばの私たちをゴールまで導いていただくためにも、皆様の忌憚のない、厳しいお言葉をいただきますようお願いいたします。

西原村教育長　　竹下　良一